

三島由紀夫の「切腹死」

—その文学への投影—

鄭 慧 娜

日本または日本文化の研究に携わっている人であれば、おそらく、ハラキリ、ジュードゥ、カミカゼという言葉を知らない人はいないであろう。三つの日本語の単語の二つまでが、日本人の自殺に直接関係したものであるというのも意味深長である。

日本人にとって切腹とは、日本固有の武士道の精神と超人的な勇気を表示する自殺の方法を意味し、映画、テレビ、歌舞伎、小説などを通し、多くの日本人に宗教的ともいえる深い感動を与えてきた。しかし外国人にとって、切腹という自殺の方法や精神は理解することが不可能であると考えられてきた¹⁾。

一九七〇年十一月二十五日に、三島由紀夫が楯の会の四人を率いて市ヶ谷の自衛隊東部方面総合監部を占拠し、自衛隊員に決起を促す演説を演じた。そのあげく、割腹自殺を遂げた。その際、介錯人として森田必勝が三島由紀夫の斬首をしたが、一太刀で切れず、数度も刀を振り下ろし斬首した。三島は四十五歳、日本国内はむろんのこと全世界を驚かせた。三島のキリ首の写真は「朝日新聞」のスクープとなり、それは欧米の週刊誌にも転載された。

ドイツ語圏だけの反応を記すと、夕刊紙「アーベント・ツァイトング」(十一月二十六日)は、「サムライ儀式による自殺、日出ざる国を震撼」という見出しで、三島の写真を入れて大きく報道された。

日本国内での三大紙のコメントを要約すると、「朝日新聞」は「三島美学の帰結」、翌日は、「いたるところに死の影があった」という三島言行録があった。「毎日新聞」には、三島が決起前に、「サンデー毎日」編集部徳岡孝夫記者に、決行者の記念写真、手紙、檄文を渡した事実を述べ、「狂気の自刃」という見出しで述べた。「読売新聞」の三

作品	主人公死亡方式
『憂国』	自殺
『獣の戯れ』	病死
『午後の曳航』	他殺
『剣』	自殺
『春の雪』	病死
『奔馬』	自殺
『暁の寺』	他殺(毒蛇に噛まれて死ぬ)
『天人五衰』	自殺(未遂)

面では、「狂気か憂国か白昼の叛乱」という見出しがあった²⁰。

以上の資料から見ても、日本人に深い影響を与えた。三島後期の小説を読むと「死への憧れ」がすぐわかるであろう。『奔馬』の最後のページ飯沼勲が財界巨頭を伊豆の別荘で刺し、崖のミカン畑に逃げて、まさに日の昇ろうとする海の前で切腹する場面がある。そして、『憂国』の切腹シーンは現実生活の反映ではなかるうか。デュルケームはその古典的名著『自殺論』において自殺を三つの社会的類型に分けた。簡単に言えば、自殺、他殺と自然死亡に分けたが、三島作品から見ると、次のように分析できようか。

以上の表から、三島小説は主人公の死亡で終わることが多い。『憂国』、『剣』、『奔馬』、『天人五衰』の主人公は、三島の分身ではなかるうか。主人公たちの自殺のシーンで死に方に接すると、三島の死は複雑で、封建武士の死と同一化するわけにいかない。『午後の曳航』では、主人公の登は母の彼氏塚崎を殺した。十三歳未満の登は二等航海士塚崎が愛情のために夢をあきらめて、「自己の生きる目標を失うという日本社会」に不満を拘き、殺した。これが『憂国』の主題の続きである。死亡理由から見ると、自殺にせよ、他殺にせよ、死亡への憧れが満ちている。三島の『行動学入門』に、「すべてのものに始めと終りがあるやうに、行動も一度幕を開けなければ、幕を閉ぢなければならぬ。行動はたびたび繰り返したやうに、瞬時に始まり、瞬時に終わるものであるから、その正否の判断はなかなかつかない。…」果して、それが武士道の「殉死」と同一性を持っているのであろうか。三島自身で演じられた『憂国』の中で、「軍服姿の中尉は軍刀を左手に突き右手に脱いだ軍帽を掲げて、雄々しく新妻を庇つて立つてお

た。『憂国』という映画で三島自身が迫真的に演じたように、三島の行動傾向は、「切腹死」という日本美への憧憬であった。

そして、三島小説の「美」は頹廢美、残酷美を目指した。その後、唯美的立場から、「武士道」への絶対化を目指すような発想に変わっていく。私が美への希求の根拠を分析するうちに、三島は「他者の美しい肉体」（『仮面の告白』）に夢想した死を、不自然死の形（清頭、ジン・ジャン）で造形しようとしたと慮れる。

三島文学においては対象を無味乾燥な生・死んだもの（客体）へと還元することになる。『春の雪』における松枝清頭と本多繁邦は、この一枚のメダルの裏表であり、繁邦はまた清頭に対して「隔てられてゐる」、すなわち彼の情熱や陶酔を自らは生きられぬという感覚を自覚する。清頭は、聡子が「絶対」へ激しい情熱を生き、またそのなかに死ぬ。清頭の夭折は、神聖な美的対象への殉死であり、他ならぬその対象によって美しく照らされた。そして、『奔馬』の自殺シーン、『天人五衰』の主人公透は貴種性を証し立てるべく服毒自殺を図るものの、結局失明するに終わり、それ以降透はこれまでの転生者の寿命とされた二十歳を越えても、無為の生を持続させていくのである。しかし、現実の三島は、死への道を選んでいたのである。

作品完成時間	文	武
一九六六年晩秋	作品『春の雪』完成	自衛隊入隊
一九六八年夏	作品『奔馬』完成	楯会の創立
一九七〇年春	作品『暁の寺』完成	自衛隊への「想い」
一九七〇年一月二五日	作品『天人五衰』完成	自殺

一九六六年以後、三島の行動と表現は大きな変化が現され出した。入隊をきっかけに「文と武」は整合したのである。つまり、切腹死の計画を立てることを示した。

三島の死の当日、自衛隊員たちは興奮し、怒り、大声で罵り、怒鳴り返していた。防衛庁の長官中曾根康弘は三島の自決に対して、これが民主主義と平和の破壊者だと言った。

注(1) 大隈三好『切腹の歴史』雄山閣出版 平成七年九月

(2) 小松伸六『美を見し人は——自殺作家の系譜』講談社 一九八一年二月 二二三頁。